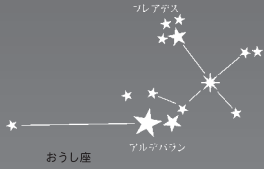


ポラリスを仰ぐ北の大地から



死のイメージ色

富良野医師会 会長 石澤 秀明

生きている人間なら誰でもそうかも知れないが、「死ぬことは、恐ろしい」と、若い頃から思ってきた。死ぬことは避けられないと合点しつつも、自分が死ぬと考えることは耐えられない恐ろしさを惹起することであった。恐ろしさの由って来たところを考えると、私の場合は大きく次の2つに集約できるような気がする。精神科医として恥ずかしいことだが、生きているのに間違っただと判断されて、焼かれそうになったら、どんなに残酷なことだろうという恐怖があった。自分が死んだ後の世界に、自分が不在であることの耐えられなさもあった。

60歳を過ぎて、実際の死が以前よりは身近に感じられるようになるにつれ、多少の変化が起きてきている。前者の恐怖については、そんなことは起きるはずがないという通常の理屈が、どうにか勝ってきている。恐怖による理不尽な想像だったのだろう。後者の不在に対する悲哀は、生まれる前も不在だったのに、死後の不在のみに対して反応するのは、バランスを欠いた過剰反応ではないかと思いつつ始めている。この悲哀については、生との分離不安という側面が大きいかもしれない。

先日、札幌で開業している同年配の女医さんが、「この前、頭がものすごく痛くなって困ったけど、良いこともあった。こんなに痛いなら死んだ方がましだと思った時、死ぬのが少しだけ怖くなくなった」と話すのを聞いて、「年を取ると段々死ぬのが怖くなくなるんだよ」などと知った顔をして答えたが、実際には、自分が死ぬことを考えて平然としていられる境地には、まだまだ遠い。

60歳を越えて多少の変化が起きてきていると書いたが、その変化にはもう1つある。私は、言葉を見ると色のイメージが浮かぶのだが、最近、死のイメージ色が黒から白に変わってきている。白日の下での死…。



戦後六十九年

紋別医師会 会長 小林 正司

毎年8月になると、新聞等では先の戦争の特集記事が出るが、戦後生まれの私には戦闘に際しての個々の兵士の精神状態というものは出版された書物による情報でしか分からない。現在では、当時のことを語りえる人が極めて少なくなっており、若い人の中には日本と米国が戦争をしたことを知らない者もいるという。昭和30年代の初め私が小学生の頃、プラモデルの出始めで、零戦、隼、紫電改等の戦闘機を集めたりしてその性能も覚えていた。

長じていろいろな戦争関連の本を読むようになり、日清、日露、大東亜戦争と三度の国運を賭けた戦争の中で、最後の戦争は敵を知らず、己を知らず戦い敗れたと言える。

米国と比較して数段劣っていた装備と補給の不足を、大和魂で何とかしろという無茶な命令の元、次々と投入され、戦死、戦病死した兵士の無念は察するに余りある。

来年で戦後70年になるが、戦争関連の本を読むことで、当時の国民の状況、兵士達の活動の実情を、少しでも理解することは、200万人以上の兵士、数十万人の非戦闘員の霊に対し、ささやかながらも追悼の意義があると考えている。

近年ベストセラーになった、百田尚樹氏の「永遠のゼロ」は小説だが、坂井三郎氏の「大空のサムライ」よりも戦闘機乗りの心情が良く描かれている名作だと思う。

帯木蓬生氏の、軍医たちの黙示録二部作「蛍の航跡」「蠅の帝国」は、意志とは関係なく戦場に駆り立たされた医師達数十人の回顧録で読みごたえがある。

日露戦争での日本海海戦に参加したバルチック艦隊の水兵で海洋作家のノビコフ・プリボイ氏が大変な苦勞の末に出した「ツシマ」で描かれた海戦の臨場感は驚くべきものがある。

日本側からの代表的なのが司馬遼太郎氏の「坂の上の雲」で、長編だが史料的にも面白い。

興味ある方には、一読をおすすめする。隣国との関係も緊張の増している昨今、歴史に学び、無益な戦いの轍を踏まないように、子ども達に伝えていくのも大事だと考える今日この頃である。

最後に私は昭和22年生まれです。